

## 漢方薬温故創新 これからの漢方薬のあり方を語る

進行 渡辺賢治

大阪大学 米田該典

東京女子医科大学 佐藤弘

日本生薬連合会技術参与 嶋田康男

### 本シンポジウムの目的

- ◎ 本シンポジウムで、中国の事情も踏まえグローバル化とローカルとの対比も含め展開したい。
- ◎ 漢方薬にも医療用と一般用がある。特に奈良県には配置薬制度というすぐれたセルフメディケーションシステムがある。これは日本の医療費削減のキーになるかもしれない。
- ◎ WHO ではモンゴルに配置薬を整備
- ◎ 生薬の安全性を担保（トレーサビリティ含め）しつつ安定供給をするためにはどうすべきか？
- ◎ 日本の自給率が 12%である現状を踏まえ、これを増やすにはどのような取り組みが可能か？
- ◎ 奈良県はもともと生薬ブランドを多数持っていたが、奈良ブランド復活への道筋は？

### 背景（渡辺）

1. 1990 年代に欧米で補完代替医療→伝統医学に注目
2. 中国では中薬管理局に国際部ができ、中医学の国際化がスタート
3. WHO 西太平洋事務局に韓国の Choi Seung Hoon 氏就任 東アジア伝統医学の標準化を推進
4. 2005 年 WHO 西太平洋事務局で国際疾病分類を作成開始
5. 2009 年より正式に WHO 本部で国際疾病分類作成開始 現在アルファ版がウェブ公開されており、新たに 23 章が設けられており、伝統医学がはいった。
6. 2009 年 ISO に新しい技術委員会である TC249 が設立

こうした国際化の中で生薬に対する需要がどんどん高まっているが、供給源としては中国が中心であり、資源の枯渇が進んでいる。本来はローカルに行われていた漢方が

2009 年 日本では民主党政権に替り、その目玉として行った行政刷新会議の事業仕訳で漢方の保険診療が対象となり、漢方薬に保険適応がなくなりそうになったが、3 週間で 924808 名の署名を集め、2010 年度は保険適応が存続となった。

しかし、漢方薬の原料である生薬が枯渇したら漢方診療は存続できない。しかしそのことを日本の国民はほとんど知らない。

### 漢方治療の現状

佐藤 医療としての漢方の重要性

嶋田 奈良県の地場産業としての配置薬

医療用の場合には薬価のしぼりがあり、価格がどんどん下がっているために安価な中国生薬に頼るようになっている。

しかし中国でも生薬資源が枯渇しつつある。

- ◎ 世界における生薬需要の高まり
- ◎ 中国国内での需要の高まり 中国は日本で使う生薬の8割を輸入する相手国であるが、同時に消費国でもある。
- ◎ 中国国内の経済発展
- ◎ 元の為替変動
- ◎ 都市部農村部の経済格差是正政策
- ◎ 投機マネー

一方日本の生薬栽培はすたれつつある。

### 中国からの安定供給確保のための取り組み

合弁会社・栽培協力など

米田

嶋田

### 日本の生薬栽培を活性化するにはどうすべきか？

佐藤 医療用漢方製剤がなくなったらどうなるか？生薬の質の低下は招いていないか？

米田 日本の生薬がすたれた原因は何か？

嶋田 奈良県の取り組みは？

### 奈良ブランド復活への課題と将来

佐藤 医療用漢方製剤の安定供給のためには 薬価の仕組みなども含め

米田 生薬栽培としての奈良の魅力 薬狩り 宇陀神社

嶋田 配置薬としての生薬確保